

丹波新聞に
掲載されました

(第3種郵便物認可)

丹 波 新 聞

市立看護専門学校

「私の学校自慢」優秀賞

終末期看護学ぶ実習評価

人の「死」と向き合い、死に直面した患者やその家族に寄り添った看護を行える看護士を育成するため、丹波市立看護専門学校が実施している実習が、日本看護学協議会の特色ある看護基礎教育を表彰する「私の学校自慢」で最高の優秀賞に輝いた。若い学生の死生観を醸成するため、医療現場だけでなく、市内の寺院や葬儀社など学校以外の施設に出向いて実習し、「生」や「死」に対する幅広い見識を持つことなどを目的にし、しており、他の学校にはない取り組みが評価された。（田畑知也）

寺院や葬儀社で死生観育む

同協議会に加盟する445校のうち、27校が応募した。このほか、福岡県で開かれた同協議会の学会で表彰された。	看護を学ぶ一死生観の醸成に向けての取り組み。同校によると、死生観の醸成は、身近な人の死に大きく関与されるという研究結果があるもの、
受賞テーマは「終末期	の、青年期の学生にとってその体験は乏しく、死生観が観念的になるケースがあるという。実習は5年前からの取り組みで、3週間ダテ

生観育む

この、青年期の学生にとってその体験は乏しく、死生観が観念的になるケースがあるという。

実習は5年前からの取り組んで、3週間てターミナルケア（終末期医療）を学ぶ。一般病棟や緩和ケア病棟、特別養護老人ホームのほか、成徳寺（柏原町北中）と羅森社キキヤの「ネムールの森 かいばり」（同町田路、現「家族葬のキキヤ」）に行く。

同寺では、河合宗敏住職から、仏教の視点から死生観をテーマにした説法を受ける。与えられた命の大切さを見つめ直し、死に対する向き合い方を考えるというもの。

傾聴することや、他者の



成徳寺の河合住職の説法を聞く学生（写真上）。キクヤの「ネムールの森 かいばら」では、納棺体験も実施（提供）



ユースエール企業認定

氷上製作所
市内4社目

電子回路装基板を製くりに努めたい」と述べ、従業員134人のうち6割ほどが女性。小さな子を持つ母親も多く、急な子の体調不良による早退、欠勤などに柔軟に対応している。省力化のための設備投資を通じ、時間外労働を減らすなど

式が行われた。菓子社長(45)は、「認定を励みに、安心して働き続けられるより良い雇用環境づくりに努めたい」と述べた。

で、従業員134人のつ



ユースエール企業の認定書を手にする菓子社長
(右)と、兵庫労働局の内藤部長・氷上町石生で

ありのままを受け入れることなど、生きる上で大切なことを学ぶとともに、死別を経験した家族に対するケアも学ぶ。「ネムールの森」では、納棺士から、死を迎えた人やその家族との向き合い方を学ぶ。故人や家族が心安らかに最期の時を過ごせるよう向き合っている話を聞き、看護師としてどうあるべきかを考える。また、希望者は納棺体験も行い、死を具体的に想像する機会としている。

同校は「実習を通じ、学生は人生観や死生観を築く。看護師にとって、患者が自分らしく生き抜くための援助をすることは、その人らしい最期を迎えることにつながっていると感じるとともに、最愛の人を見送る家族の苦痛をくみ取り、支えることも看護師の大きな役割だと感じ取っている」としている。

記事抜粋

人の「死」と向き合い、死に直面した患者やその族に寄り添った看護を行える看護師を育成するため、丹波市立看護専門学校が実施している実習が、日本看護学校協議会の特色ある看護基礎教育を表彰する「私の学校自慢」で最高の優秀賞に輝いた。